

命拾いした「8964・天安門事件」（1989年）

政治に関する内容はセンシティブであり、多くは語らないが、現地で私自身が事件を体験して感じた思いは、「大部分の学生は自由を求め、謳歌しているだけ」というものであった。以下は私自身が経験した「8964」前後の出来事である。

私が初めて中国・北京入りしたのは1987年4月だったが、当時はいかなる場面（公式、非公式、宴席など）でも共産党の批判、高級幹部の悪口などはご法度であった。日本語のできる大学の教授や、日本語専攻の学生はもとより、私なりに親しくなったと感じていた友人も、少なくとも私の前では政府・共産党に対する批判的なコメントはなかつた。

社会が相当に抑圧された文化大革命の影響がまだ色濃く残っていた時代であった。従つて、「8964」の頃は、民主主義への移行、思想の変更、国家体制へ不満というよりも、学生たちはそれまでは許されなかつた自由な議論・発言・行動・恋愛をたっぷり楽しんでいただけのように感じた。

少なくとも、制圧が始まるまでは天安門広場の学生たちは自由を謳歌し、楽しんでいた。結果は周知の通りの武力制圧となつたが、中央政府も事件で学び、すべてを厳しく管理するのではなく、経済活動は自由にさせることで不満を解消しつつ、国家の発展を促進させてきた。その後のすさまじい経済発展はご存知の通りである。

事件当時、私は留学生だった。学生による民主化要求の運動が激しくなり始めた、5月中旬から日系のテレビ局の北京支局で取材班の通訳のアルバイトをした。当時、中国では留学生のアルバイトは原則禁止されていたが、現在ほどコンプライアンス・法令順守は厳しくなく、また、中国語の通訳の需要は多く、大部分は

単発の仕事であつたが、様々な通訳のアルバイトが存在し比較的堂々とバイトしていた。今は管理が厳しく、不法なアルバイトは表面上は存在していないことになっているようだが、実はもうもある。

中国人学生がデモに参加するため天安門広場へ行っていたため、学校では授業ができず、ほとんど自習となっていた。

私が、アルバイトを始めた5月中旬の時点では、学生、そして、我々外国人もまさか武力による制圧がされるなどとは想像もしていなかつたが、中国が大きく変わりつつある歴史の変化をうすく感じていた。

ちなみに、89年は、昭和天皇の崩御・平成の始まり、ベルリンの壁の崩壊・東西ドイツの統一、東西冷戦の終結など世界的に歴史が動いた年であった。

私は記者、カメラマンの3人で、天安門広場、北京大学、北京駅など市内中心部を取材し、学生や市民を取材していた。学生たちは気分が高揚し、毎日がお祭りのような状態で、海外メディアの取材にも協力的で、マイクを向けると、全員が「自由を手に入れたい」としつかりとした意見を表明し、同年代の私は刺激を受けた。

私は、テレビ局の支局が市内中心部にあり、留学先の大学は郊外で遠かつた為、1986年にできたばかりの北京崑崙飯店（現在も存在する5星のホテル）に宿泊し、自分の好きなおいしいもの（中華、日本食など）を3食たっぷり食べることができ、専用車での移動で非常に快適なアルバイトであった。逆に言うと24時間勤務に近かったのだが・・・。

北京は非常に暑く、街中心部も学生の熱気で異常な雰囲気があつたことを、今も覚えている。アルバイトを始めて2週間ほど経過した6月3日の深夜に、当日のアルバイトを終えて、ホテルで休んでいた私に支局から緊急収集の連絡があ

り、支局に駆けつけた。香港系メディアから、「天安門広場で制圧が始まつたらしい」との情報を入手しており、支局内に集まつた日本人全員に緊張が走つた。

我々は現場での取材を行うために、数班に分かれ、私は記者・カメラマンの3人で一緒に車で天安門広場に向かつた。長安街は装甲車が走行しており、大混乱していた。西单という天安門から2キロほどの場所からは走行できず、裏道を走つて天安門広場に向かつた。途中、オレンジ色の薄暗い照明の下で、ケガをして血まみれの多くの中国人が病院に運ばれていくのを見た。何とか天安門広場の近くに到着できた時に驚いたのが、普段は夜間でも照明により非常に明るい天安門広場が異常に暗く、ほぼ真っ暗であり曳光弾が飛び交つているのを見て、恐怖とある種の興奮を感じたことを覚えている。

天安門広場は大変危険であり、わずかな距離だが匍匐前進で逃げたので肘から血が出ていることを感じたのは、天安門広場を見渡せる北京飯店についてからだつた。テレビ局の取材班は北京飯店の最上階の南西向き（天安門広場の方向）の部屋から広場の模様の撮影を続けていた。銃声が響いており混乱の中で私は強く恐怖を感じながら友人たちの安全を心配していた。

情報管理の為、この時点では中央政府によつて衛星回線が止められており、北京支局から海外へ映像を送ることができなくなつていた。1989年はまだインターネット、Wi-Fiもない時代であった。ちなみに海外へ国際回線でコレクトコールをする場合は、電話局、ホテルなどからオペレーターを経由して申し込まなければならず、回線自体が十分ではない時代であった。

私は、映像を日本へ届けるために、ホテルの部屋に持ち込んだ機材で簡単に編集した映像をベーカムに保存し、カモフラージュの為、ビスケットの箱の中に忍び込ませ、ビニル袋に入れ、あたかもスーパーで食品を買い物をしたような偽装工作をして、一人でタクシーに乗り北京空港へ向かつた。

6月4日朝の5時頃だった。当時は第3環状線、空港高速道路はまだなく、一般道で空港へ向かつたが、すべての主要交差点（10か所くらい）で中国人民解放軍の検問を受け、通常の3倍以上の3時間ほど時間がかかったことを覚えている。

交差点で解放軍の軍人に銃口を向けられ「どこに行く？何をしている？」という質問をされるたびに、日本のバスポートを見せて「日本人です。帰国するので通して欲しい」と説明し、通してもらつた。

数時間前に天安門広場で学生を武力制圧した解放軍の兵士達であり、何度か銃口を向けられた時は生きた心地がしなかつた。

4日前、空港はまだ封鎖されていなかつたが、事件後に急きよ避難帰国する人でごつた返していた。あのように多くの外国人が北京空港ロビーにあふれかえつた状況を見たのは、後にも先にもこの時だけである。

私は日本へ緊急帰国する日本人の方を探し、○○テレビ局ですが成田空港で待つ支局の人間に映像素材（ベーカム）を渡してほしいとお願いした。

今思えば捕まつても不思議はなく、よくも図々しくお願ひしたし、また、よく受け取つてもらえ、届けてもらえたものだと思う。今では考えられないことである。ベーカムを託送依頼し終え、市内に戻るためタクシーを探したが、明るくなるにつれ空港、そして市内はさらに混乱し、タクシードライバーが危険であるからと市中心部へ行くことを嫌がり、数台に乗車拒否され、ようやく乗つたタクシーにも通常の10倍ほど料金を要求された。混乱する道路をゆっくり走りながら、睡眠と疲労から車内でうとうとしながらも、なんとか支局に戻ることができた。不思議なことに市内に向かう車両の検問はそれほど厳しくはなかつた。要は逃亡する学生を捕まえることが目的、つまり出していく人間の管理を厳しく行つていたからであろう。

支局に到着し、支局長に素材を確実に渡せたことを報告したところ、皆さんに喜んでもらえ、学生ながら大きな達成感を感じた。

4日夕方、映像素材は無事成田支局経由で東京本社に届き、天安門広場の生々しい映像が日本のテレビ局で一番最初にニュース番組でトッピニュースとして放送され、スクープ映像となり後日「北京支局特別賞」のボーナスをもらえた。

私は6月5日まで3週間ほどアルバイトを続けたが、テレビ局の方から帰国をすすめられ、6月7日のチャーター便で帰国した。

帰国に先立ち、4日午後、一旦大学に戻った私は、自分自身で見た事実を各国の数十名の学生達に説明した。大学内では情報が遮断され、ほぼ正確な情報はなかつたので全員がかたずをのんで必死に私の説明を聞いてくれたことを今でもよく覚えている。

白人や黒人など外見ですぐに外国人とわかる学生はまだしも、中国人と見分けの付かないアジア系の学生はパスポートを常に携帯し、部屋のドアには国旗を掲げ、中国人の部屋ではないことを明確にする学生がほとんどであった。

また、事件後、各國ごとに大使館の対応が異なり、全留学生を非難させる為に専用車を準備し大使館に避難させたり帰国させた国、避難を呼びかける国、何もしてくれない国などさまざまであり、残された留学生は不安でいっぱいであつた。

日本はこの時決して対応がよかつたとはいがたい状況で、日本人は他国に比べると人数多く、連絡の手段も限られたので仕方がなかつたかもしれないが、大使館の車両で避難していく他の留学生を見ながら、不安を感じながらも、自力で避難するしかなかつた。

帰国後に見た事件関連の報道で、「日本人は全員安全な場所に避難した」との大使館の発表の報道があつた6月5日・6日頃は多くの日本人留学生が学校内で不安な時間を過ごしていたことは事実である。

私は、実は6日の午後、同じクラスにいた日本人駐在員の方から、大学にいるよりは安全であろうということから、大学よりは北京空港に近い外国人専用の居住区「光明公寓」に避難させてもらつた。

6日の晩は、大学より安全な外国人専用の高級マンションで、トンカツなど日本食をたっぷりごちそうになり、日本のテレビによる報道を見ることができ、現地の情報を日本のマスコミの報道で知るという皮肉な状況ではあつたが、状況を理解でき、安全な環境でゆっくりやすませてもらつた。この時点で駐在員には帰国命令は出ておらず、その家族の方は北京に継続して残り、業務を継続するということで、社会人の辛さを感じた。

大学から光明公寓までは長期間懇意にしていたタクシードライバーに無理を言つてお願いし光明公寓まで送つてもらつたのだが、彼は事件に絶望していく、「逃げられるお前が羨ましい」と言われた時は、胸が張り裂けそうで辛かつた。

7日の午前中、仲の良かつた留学生仲間と北京空港に向かつた。空港はさらにに混乱しており、航空券を求める外国人であふれていた。私は日本人留学生と一緒に空港に到着し、数名ごとに分かれて主要航空会社のカウンターに数時間並び、一番最初にANAのチャーター便のチケットを購入でき、7日午後の便で羽田空港に向かつた。

チケットが購入できる保証はなく、並んでいる間、水もなく、まともに食事もとれず、そして、誰からともなく、解放軍によつて空港が封鎖されるかもしれない！との噂が出回り精神的に肉体的に非常につらい時間であつた。帰国

便で食べた機内食のおいしさは忘れない。

羽田空港に到着した際、空港にはマスコミが沢山いて、私は肘の怪我に包帯を巻いていたため、映像的にインパクトがあつたのか取材を受けた。

多くのカメラに撮影されながら、気恥ずかしかつたが、日本に無事到着できた」とに感謝し、心から安心したことを覚えている。

アルバイトの最後に命の危機にさらされ怖かつたが、結構な金額のアルバイト料をもらえ、後日香港で好きなものを買い物をし、おいしいものをたくさん食べた」と覚えている。

ちなみに、当時の外国人留学生の年間の学費・寮費は合わせて約30万ぐらいであり、毎月2万円程度で生活ができたので、一時帰国の費用を合わせても年間60万円（3万人民元）ほどの金額で中国語を習得でき、特別な経験をすることができた。

また、就職活動の面接の際にこの話をした為、学生の中で目立つてしまい、ほかの学生には申し訳ないくらい私に質問が集中し、私は数社から早期に内定をもらえ、就職活動は比較的簡単であった。

本稿を執筆しているのは、2019年11月19日である。香港で逃亡犯条例の改正に反対するデモが行われ、警察の取り締まりにより学生に多数の負傷者が出て

ている。現地で学生が「政府による暴力が恐ろしいが、それでも戦い続けなければならぬ」とメディアのインタビューに答えていた。

1997年6月に天安門広場で多くの学生が私に訴えた同じ内容のコメントである。香港の安全な社会が戻つてくることを祈る。